

「世代間関係—民法学の観点から—」	冷水登紀代（甲南大学）
「家計からみる現代日本の世代間関係」	村上あかね（桃山学院大学）
「高齢者介護意識にみる若年・壮年の世代間関係と性別役割 —希望と実現可能性のギャップ—」	中西泰子（相模女子大学）
「日本農村高齢者の住まいと世代間関係」	水嶋陽子（常磐大学）

2日目（6月16日 日曜日）

「中国都市部の子育て支援と世代間関係」	鄭楊（中国ハルビン師範大学）
「中国農村部の世代間関係と都市化の影響」	施利平（明治大学）
「韓国の高齢者と世代間関係—少子高齢化のなかの家族と福祉—」	金香男（フェリス女学院大学）
「少子高齢化を迎えたスリランカの世代間関係と社会福祉」	中村沙絵（京都大学）
「アフリカの高齢者ケアをめぐる『3つの神話』を問い直す —社会福祉と親族研究の接続領域から—」	増田研（長崎大学）
「個人的な住宅—ハウジングにみるフィンランドの世代間関係—」	高橋絵里香（千葉大学）

趣旨説明でも言及されていたが、「世代間関係」は日本の学会ではあまり聞きなれないテーマである。そのためか、シンポジウムの内容の充実度に対して参加者が少ない印象を受けた。しかし「従来、別々のテーマとして議論されてきた、親世代の子世代に対する養育／教育という問題と、子世代の親世代に対する扶養・介護という問題を一つのパースペクティブで捉える」（シンポジウムの趣旨より引用）という視点は重要であると思われるし、報告者個人としても多くのことに気がつかされた。なお、本シンポジウムの内容は学会監修の「家族研究の最前線」シリーズの第5巻として日本経済評論社より書籍化される予定とのことである。（中村真理子 記）

移民政策作業部会（WPM, OECD）参加報告

6月24日から26日にかけてフランス、パリにあるOECD本部で「国際人口移動の今後の動向に関するタスクフォース会合」及び「移民政策作業部会（WPM）」が開催され、日本政府からは厚生労働省職業安定局外国人雇用対策課の浅野亜里沙係長及び、国立社会保障・人口問題研究所人口動向研究部第3室長の是川夕が参加した。

移民政策作業部会はOECDの雇用労働社会問題委員会（ELSAC）の下に設置され、毎年秋に開催される「移民専門家会合（SOPEMI）」と並んで、毎年6月に行われるものであり、OECD加盟国各国の移民政策に関する実務担当者が一堂に会し、各国の最新の情報、意見交換を行うことを目的としたものである。

また、今般、来年1月に開催される「移民に関するハイレベル政策会合」に向けて、「国際人口移動の今後の動向に関するタスクフォース会合」が開催され、今後の国際人口移動を予測するにあたって主要なシナリオに基づいた討議が行われた。

会合は両者合わせて3日間の日程で行われ、初日にタスクフォースが開催された後、2日目以降の移民政策会合では事務局より最新のプロジェクトの進捗、及びハイレベル政策会合の準備状況について報告があった他、それらに関して参加者の間で意見交換が行われた。是川からは今後、送り出し国におけるメカニズムについて精緻な分析が行われる必要がある旨、提案した。

また、同会合開催中、今後の OECD 事務局の活動方針を議論するビューローメンバー会議が開催され、是川も7名からなるビューローメンバーの一人として参加した。同会合では来年1月に開催予定のハイレベル政策会合の内容について議論が行われた。(是川 夕 記)

第10回人口地理学国際会議

2019年7月1日から3日にかけて、英ラフバラ大学 (Loughborough University) において第10回人口地理学国際会議 (10th International Conference on Population Geographies, 以下 ICPG と略) が開催された。ICPG は、人口地理およびその関連分野の研究者が定期的集って最新の研究成果を発表する国際的な学術集会として、2002年の第1回大会 (英セント・アンドリュース) 以降ほぼ2年ごとに開催されている。今回の大会では、17の一般セッションで約90の研究報告が行われたのに加え、2つの基調講演セッション及び *The Future of Population Data* と題するパネル討論セッションが設けられた。基調講演では、トランプ政権誕生以降の米国内における移民人口の分布の変化に関する分析や、イギリスの EU 離脱 (いわゆる Brexit) をめぐる混乱について、国境を越えて移動する人々の視点からの考察に基づく報告が行われ、こうした政治的動向の影響への関心の高さがうかがわれた。一般セッションのテーマは、国内・国際人口移動、地域人口、家族・世帯、高齢化・ライフコースと多岐に及び、いずれも活発な討論が行われたが、前回大会 (2017年、米シアトル)、前々回大会 (2015年、オーストラリア・ブリスベン) と比較して、地域人口推計に関する手法や評価に関する研究報告が少ない印象を受けた。

当研究所からは、林玲子 (国際関係部長)、小池司朗 (人口構造研究部長)、菅桂太 (人口構造研究部第1室長)、鎌田健司 (人口構造研究部第2室長)、井上希 (社会保障基礎理論研究部研究員)、筆者の6名が参加し、以下の研究発表を行った。

(いずれも口頭発表)

- Reiko Hayashi "Health and long-term care workforce shortage and the role of migration"
- Shiro Koike, Keita Suga and Kenji Kamata "The Methods and Results of the Regional Population Projections for Japan"
- Masataka Nakagawa "Migration of Adult Children, Living Arrangements and Geographical Distances to Parents: Analysis of the Japanese National Survey on Migration"
- Keita Suga, Shiro Koike, Kenji Kamata, Futoshi Ishii, Miho Iwasawa and Masakazu Yamauchi "Municipal Death and Birth Projections Consistent with IPSS (2018) Regional Population Projections of Japan: 2015-2045"
- Kenji Kamata, Shiro Koike, Keita Suga, Masakazu Yamauchi "An Evaluation on the Accuracy for the Regional Population Projections in Japan - Investigation on Spatial Dependencies in the Age-Specific Projection Error Rates"
- Takashi Inoue and Nozomu Inoue "The Web System of Small Area Population Projections for the Whole Japan and its Applications: Focusing on Rapid Aging in Japan"

なお、次回 (第11回) の ICPG は2021年9月に東京で開催されることが決定しており、ラフバラ大会2日目の夕食会では、次回のホスト校となる青山学院大学の井上孝教授による大会案内のプレゼンテーションが行われた。(中川雅貴 記)